あくび指南

試し読み

蓬客の倒るる庭

ヤツガレは野良である。そう、宿なし、蓬客、根無し草だ。生まれ育った土地を飛び出してから、もう随分と一所には留まらず、ずっと放浪を続けている。落ち着かぬ気なのか、落ち着けぬ性なのか、理由は判らぬ。

名は『ヨシ』。もう随分と昔の記憶だが、オヤジ殿とオフクロ殿にそう呼ばれていた。

猫どもはヤツガレを「コレ、はぐれ者」と呼び、人はヤツガレを「コレ、ノラ」、あるいは「コウ、ノラネコや」などと呼ぶ。その種々雑多な呼ばれ方を経験した今となっては不思議なのだが、親に「コレ、ヨシ」と呼ばれた覚えがない。かすかな記憶では、ヤツガレが塒の中を走り回って暴れて、布やらなにやらを破いても、オフクロ殿は「ヨシヨシ」としか申さなんだ。近所の老いぼれ猫を「死にぞこないがよぼよぼしよった」と悪態をついても、オヤジ殿は「ヨシヨシ」と頷くばかりだった。

これらの記憶から愚考するに、「ヨシ」はヤツガレの名ではないのではないか、と思う今日この頃である。うむ、恐らくそれが正しいのであろう。オヤジ殿もオフクロ殿もヤツガレに名付けるつもりはなかったのではなかろうか。

とは言え、今となっては何かしらの呼び名がないと、何事も面倒くさい。

誰かに「コウ」「コレコレ」と呼ばれて、ヤツガレ一人しか居らねば、他でもない己のことだと判る。だが、他に何人もいるところでそう呼ばれたところで、誰を指しているのか判ろうはずもない。「コレ、そこの灰色」と呼ばれたとして、他にも灰色がいればややこしかろうし、「コウ、ハチワレや」と言われても、他にもハチワレがいれば、互いに困惑した顔を見合わせるであろう。「灰色の体毛にハチワレで、カギしっぽ」なんぞは、もう長くていけない。

そのような次第で、何某かの呼び名が必要であろうと思い至り、いつしか「ヨシ」と名乗ることにした。

幸いに灰色の体毛にハチワレでカギしっぽのヨシと言う猫にはついぞお目にかかったことがない。もしそんなことがあれば、その時にはもう仕方がねェ、と困惑顔を見合わせて、呼んだ者に「ヤツガレのことかい？」とでも尋ねることにしよう。

「ヨシさん。コウ、ヨシさんたら。そこへおいでかェ？」

少し鼻にかかったような甘ったるい声がヤツガレを呼ぶ。それを聞くと、ぞわぞわと尻尾の付け根が膨れたような気がして、落ち着かない気分になるのは、いかがしたものか。

ヤツガレは何故かおなご衆と接してきた覚えがほとんどない。もちろん、出会わなかったのではなく、関わろうとしなかったからだ。苦手なのか、むしろこの上なく好むからこそ、落ち着かぬのか、皆目さっぱりである。道理（わけ）はわからぬにしろ、落ち着かぬのだから致し方ない。ヤツガレは声が上ずらぬようにと深呼吸して、それでもやはり引きつったよう

な声で、ああ、だか、はい、だか判然とせぬ言葉を呟いた。
「アラ、やっぱりおいでになった。ネェ、ちょいとこちらへおいでなさいナ。姐さまがかつぶしをかいたのを頂いたの」
この家に住まう女主人のことを、りんは姐さまと呼ぶ。貰ったと言うが、恐らくは横から当たり前のような顔をしてちょろまかして来たのだろう。とは言え、かつぶしはたまらぬ好物だ。ヤツガレはそろりと縁の下から陽の元へと這い出した。沓脱ぎ石のところから見上げると、縁側の上から茶色のブチがヤツガレを見ていた。
少し剣のある婀娜っぽい目付きに、またしても全身がそわりと落ち着かぬのを感じた。
「おあがんなさいナ」
彼のおなごの傍らから、芳しい香気が漂う。かつぶしだ。ヤツガレは誘われるまま縁側に上がり込んだ。既にかつぶしを頬張っていたりんに倣い、ヤツガレもふわりとそよ風にその身を揺らす羽衣のごとく柔らかい一帖を口にした。
旨味溢れるかつぶしを味わっていると、コラッ、と言う凄みのある大音声とともに、どすどすと板間を踏みつける音がした。みればこの家の小女であった。
「この泥棒ネコどもがっ！」
大音声にヤツガレとりんはわっと蜘蛛の子を散らすように逃げ出す。ヤツガレはここ数日寝床にしている縁の下へ慌てて飛び込んだ。
「まったく、油断もスキもねェ。次ィ見かけたら思い入れ締め上げてやる」
身を潜めていると、床上からまだ子供のクセにいっぱしの脅し文句を呟く声が聞こえて、怒りに床板を荒々しく踏み鳴らしながら足音が台所へ去って行った。ヤツガレはほっと安堵の溜め息を吐く。
ヤツガレはひょんなことから生まれ故郷を飛び出し、流れて江戸へ来た。ハナから江戸を目指して居た訳ではない。ただあちこちを見て回っていただけである。もちろん江戸という町があることは聞いていた。長崎、京や堺とも違う、それでも人や物が多く、建物がひしめき、人ばかりか猫も、あまつさえネズミですら勢いの違うところだと言う話だった。折角の流れ暮らしならば、一度くらいは見てみるかと立ち寄っただけで、居つくつもりは毛頭なかった。
だが、物珍しさに町を歩き回っていたところで、取り巻きを連れた、いかにも腕っ節でよそ様の意思を砕くのが生き甲斐と言いそうな物騒な輩が、目の前に立ち塞がった。頭分と思しき片目に傷を負った体格の大きなキジトラ猫がずい、とヤツガレの前に出たと思うと、「向こうキズのテツ」と名乗った。
「ヤツガレはヨシ。あちこちを旅しておりやす、しがねェノラでござんす」
そう名乗ったヤツガレにテツは明らかに機嫌を損ねた。ヤツガレはその名になにがしかの反応を返すべきであったらしい。言い訳する間もなく、テツと取り巻きたちはこの界隈の平穏を保つためだとか言いながらヤツガレを物寂しい雑木林へ連れ込んだ。そして、在所はどこだとか、なんの用が

そらのうてな《後篇》

用人、村山は重たい溜息を吐いた。

年こそは離れていたが失踪した紀氏は、幼少からお世話をしており、常に側に控えていた。生来から利発なお方である、先代の御所様、熙氏様直々の教授に応え、めきめきと力をつけ、頼もしい〝御所様〟ではないかと村山も鼻が高かったのだ。

それなのに。

――「村山、吾は実家（いえ）に帰ろうと思う」

まさかそのようなことを言われるとは思わなかった。

この夏から紀氏様はご気分が優れない、それは誰もが晴れ間の少ない天を案じているのだと考えていた。青天が少ないと稲の育ちも悪く、米が不足する。先代御所さまもそうだった、喜連川には米しかない、宿場で用意する米がなければ誰も立ち寄ったりはしない。飢饉でも米を切らさず一人の死人を出さなかった先代の熙氏様である、紀氏は義父を尊敬し、慕っていたし、民と家臣のことを考え、皆の期待を裏切らぬよう努力していた。

説いても説いても、紀氏の意思は固く、翻そうとはしなかった。彼の憂いは天だけではなかったのである。

決定的なのは『姫との不仲』とそれに尽きよう。

村山は折れ、紀氏の気が済むならと城下町に家を用意し、旅装道具を整えた。銭一枚の使い方も知らない紀氏に勝手に出ていかれたのではたまらない、どうにか思いとどまってくれるよう時間を稼ぎたかった。その間の好転を待ち望んでもいた。だから、素知らぬ顔で残り、家老相手に紀氏が戻りやすい環境を作るべく奮闘しているのだが、一色範勝の方が口が達者で話は二転三転してしまい、進まない。なまじ勘が良く、気働きをする質の者を家老なんぞにするものじゃない、紀氏もこれを相手にすると疲弊していた。

家老達は居室から紀氏が消えたのに気付くとにかく屋敷内を探し、城を探した。そして、村山には実家に知らせることはない、と釘を刺した。先代には日を待ってから報告することにして、それまでに紀氏の影武者を引っ張ってきた。藩主の不在を一部の家臣しか知らないようにするのは理解出来る、婿養子が藩から逃げたなどそれこそ恥だし、内々に鎮静化させなければ藩としての面目が立たない。すべては水面下で動いた、そのため事情は入り組んで、滞りがちにもなっている。

一色分家から影武者がやって来て半月、範勝は実はこの廻村を狙い、見付け出した紀氏と征之助を入れ替えさせ、元通りにする算段をしていたらしい。

「旅籠、駕籠屋、道中師と探りを入れたのですが、紀氏様は見付からず、手の者を肥後に向かわせようかと思案していたところでした」

と、征之助を小姓に任せ、赴いたところで範勝は渋い顔で告げた。家老は家臣の内でも格上だが、紀氏付きである村山と近習の者には同格に扱ったため、双方の軋轢はなかった。先代御所様は上級、下級家臣の別を明らかにするようにしていたが、家老は掻い摘むようにしてその典に従うようにしている。そもそも古河公方様の由緒も何もない村山などは家臣団にとってもとりたてて睨み合う要素を持たない存在なのである。

「どうかなされましたか」

「紀氏様が、実家へ送られた文の下書きが見付かりました」

「下書き」

拍子抜けする内容だ、つまりは探索の進捗はないということなのだが、そのようなものをよくぞ探したものとも思う。

「文武共に物足らぬ、周りが子供扱いしすぎると憤懣がおありのようでござった。我らの至らぬところで面目次第もない」

村山にも反省を促しているのであろうか、子どもではないと訴えるのならばせめて下書きは塗り潰すなりをして貰いたかった。互いに同じように受け取っているのかささやかな内省の時間は終わり、すぐに直って、それはそれとして、という顔になる。

「征之助の朋輩と申す者が来ました」

「いつ」

ずっと紀氏役を演じている征之助を見張っていたが、そんな人物はついぞ見ていない。本人も人目がなくなると気が抜けたように畳に臥すくらいで。

「つい先ほどです」

医師が言う、領地内でも道具立ても大大名さながらの見回りなので連れる家臣は多く、座敷には村山を含めて五人が揃っている。家老、用人、小納戸頭、代官に医師、これらが一色征之助が影武者であることを知っていた。療養中である近習は知らないことになっているが、前以て村山が腰痛で休むことにせよと命じたのだから知っており、いまは町に潜んでいる紀氏や細川家とせっせと遣り取りをしている手筈である。こちらにいっかな便りは届かないが、紀氏は村山が用意させた家に休んでいるはずだった。

「ほう」

膝を詰める。

「これが兄弟かと見紛うほどに紀氏様に似ております。本人は学問所から一色分家へやって来て、本家の方に寄越されたと言っておりますが、どこの家中の者とは申しませなんだ」

うんうんと家老が頷いている。

「こんなときにそのような者が現れたのも何かの縁」

代官が言う。

「左様。神仏の御指図と思ってよいかと」

小納戸頭が続く。

「これを暫時囲って、様子を見るのは如何でござろう」

「……」

家老方の肚はおおよそ読めないではない、これまで失踪の理由が定かでなかったため、ただ探索のみで戻すことを第

＊お願いとおことわり＊

本PDFは試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本PDFの内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本PDFを有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋
URL: http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/
Mail: nedocoya@gmail.com
Twitter: @nedocoya4pr